

(7) ホクシン

－ 3～4日の早熟が武器で今や日本一の生産量に－

チホクコムギは、北海道初のめん用品種として、農家の努力により弱点をカバーしながら、栽培面積もその品質の評価も大きく伸びていきました。品種育成としては当然、チホクコムギが世に出る前からその改良に取り組んでいました。雪腐病、穂発芽の被害は依然として重要な問題であり、赤かび病による被害も多くなってきていました。北見農試ではその欠点を改良すべく、片親にチホクコムギを使いながら耐雪性、耐病性に優れた親を掛け合わせていました。

ホクシンの交配（北見35号／北見42号）は昭和54年に行われ、母親の北見35号は早生の系統であり、耐雪性、うどんこ病抵抗性がチホクコムギよりも優れており、穂発芽耐性もチホクコムギよりも優れていました。北見42号は後のチホクコムギです。ホクシンとなった系統は奨励品種決定調査では北見66号の名で試験されました。北見66号は当初の期待どおり、チホクコムギの欠点を改良した系統であり、熟期がチホクコムギよりも4日程度早い、やや早生であり、また、耐雪性（各種雪腐病抵抗性）、うどんこ病抵抗性は両病害に強いホロシリコムギ並でした。

また、穂発芽耐性はチホクコムギよりも優れ、熟期が早いこともあり、北海道の穂発芽被害を軽減する期待がもたれました。収量的には耐雪性が優れること、熟期がやや早生であること（北海道では8月中旬から雨の降る頻度が多くなる傾向にあり、特に小麦の主産地である十勝地方では、早生の方が安定的である）からチホクコムギと比較して1割程度多収です。品質的には製粉性はチホクコムギよりもやや良く、小麦粉の色はやや黄色みがあり、良好で製めん性はチホクコムギ並かやや優れます。

ホクシンは、平成6年に品種として北海道で採用され、平成7年から農家で栽培が始まりました。ホクシンの栽培が開始された平成7年は、過去最大の穂発芽被害により、平成8年は、赤かび病の大量発生により、北海道の小麦の収量は、平年収量のおよそ半分という大きな被害を受けました。しかし、その中でもホクシンの特性は十分に発揮され、品種に対する農家の興味

をホクシンに急に向けさせる結果ともなりました。平成9年産では栽培面積は約4万haに達し、その後も面積は増え続け、平成12年産では8万haを越えるものと予想されます。

実需者側からは、早急な品種の交代は好ましくないものとして、栽培面積の増加は徐々に行ってほしいとの要望が出され、北海道としても、計画的に面積の拡大を行うように努力を行いました。小麦が加工作物であることを考えれば、実需側の意見は当然ですが、二か年の大不作の影響は全く大きいものでした。この間、北海道では品質面を悪化させないように、適正な栽培法を行うように指導し、特に製めん性を左右する蛋白含量については、適正範囲を超えないよう、窒素肥料の施肥方法について、展示ほを多数設置し、過去に例がないほど指導を徹底させました。

平成9年は、ホクシンについては品質が良好なものが生産できましたが、平成10年産は、極端な低温と日照不足により、全体的に色はやや劣りました。平成11年産は一部を除き色は優れており、関係機関の取り組みが結果として現れています。平成12年産の作付面積は、ホクレンの調査によりますと8万4千haが見込まれています（北海道の小麦品種で、作付面積が最も多かったのは、昭和56年（1981）のホロシリコムギで約8万7千ha、次いで平成4年（1992）のチホクコムギで8万6千ha）。

ホクシンは、多くの点でチホクコムギの欠点を改良し、作りやすい品種ですが、平成3年に北海道としては初めて発生し、その後コムギ縞萎縮病として確認された病気には弱く、同病害はポリミキサ菌が媒介するウィルス病で、防除が不可能なため、この病気が発生しているところでは、ホクシンの栽培はできません。また、近年、北海道で発生する赤さび病は、病原性が以前とは異なっており、ホクシンは高温乾燥気味な条件では、赤さび病が多発しますので、そのような場合は早期に防除を行う必要があります。

今後の民間流通では、品質に優れたものが高い価格で流通しますので、適期は種を行い、過剰な窒素施肥をしないなど、基本技術を守り、今以上に良質麦の生産に努めることが非常に重要になります。

＜柳沢 朗＞



成熟前のホクシン（右）とチホクコムギ（左）